

## 「第20回庭野平和賞」 総裁あいさつ

本日は、「第20回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、多くのご来賓のご臨席を賜り、深く感謝申し上げます。第20回という節目の「庭野平和賞」を、長年にわたり核兵器の廃絶、武器輸出の削減に取り組んでこられたプリシラ・エルワーズィ博士にお贈りできますことを、大変光栄に思います。

すでにご紹介がありましたように、エルワーズィ博士は、反核平和戦略の権威として知られる「オックスフォード・リサーチ・グループ」の所長を務めておられます。その研究成果は、世界中の政府関係者、研究者に正確な視点を与え、国際的な軍縮交渉にも多大な影響を及ぼしています。

私が、とりわけ感銘を受けますのは、エルワーズィ博士の「人間に対する優しいまなざし」であります。人は、ややもすると相手を善悪で決めつけたり、敵味方に分けて判断したりしがちです。しかしエルワーズィ博士は、あらゆる人の心に宿る善なる心を信じ、対話を通して、一步一步、平和実現への道を歩んでこられました。

その対話のネットワークは、核兵器の廃絶を目指す各国のNGO関係者はもちろん、いわばその対極にある、防衛省の官僚、軍事計画者、兵器設計者、戦略専門家、政治家にも及んでいます。個々の立場も、宗教的背景も異なる人々が、同じテーブルにつき、胸襟を開いて議論することができたのは、ひとえにエルワーズィ博士の卓越した人柄があつてこそこのことでもあります。

エルワーズィ博士をはじめ、「オックスフォード・リサーチ・グループ」の主要なメンバーは、クェーカーの信徒であると伺っています。クェーカーでは、すべての人が、神の子としての資格、つまり「うちなる光」を持つとされています。また「高潔さ」「質素」「平等」「共同体」「平和（非暴力）」を倫理規範としておられます。エルワーズィ博士の

非暴力主義、博愛主義に貫かれた諸活動は、こうした信仰の結晶ということができましよう。

最近、私は、「いのちの子」という言葉をしばしば使わせて頂いています。「第18回庭野平和賞」の受賞者であるエリアス・チャコール師が、私との対談の際に使われた言葉であります。仏教徒は「仏の子」と呼びます。キリスト教徒は「神の子」とも、あるいは「人の子」などとも呼びます。「いのちの子」とは、私たちの国家・民族、宗教・文化が違って、人間として共に生きている――この自他の宗教的な枠などを超えて共感できる普遍的な呼び方であるといえるのであります。

このようないのちの一体感を、法華経では、『今この三界はわが有なり、その中の衆生は悉くわが子なり』と説いています。すなわち「今この世界の生きとし生けるものは、悉くわが子である」というこの仏の大きな世界観こそ、人間が到達すべき最も高潔な精神であると申せましよう。

エルワーズィ博士が進めておられる非暴力的な手段による諸活動も、こうした、いのちに対する限りない敬意、慈愛に満ちたものであります。国家・民族、宗教・文化の違いは、人々を分裂させる要素であってはなりません。この世に存在する「いのちの子」は、本来、みな等しく尊いいのちを生きている――こうした愛と慈悲の智慧に基づくとき、人は、暴力を放棄し、対話と協力による共生の道を歩むのであります。

しかし現代の世界は、いまだに暴力と分裂の文化に支配されています。米英軍を中心にしたイラク戦争は、一般市民にも多くの犠牲者を生み、兵士の死者も多数にのぼっています。暴力は、新たな暴力を呼び起こし、人々の怒りや怨みの心は、さらに大きくなろうとしています。

こうした人間の争いの世界について、東洋思想及び政治哲学の権威として知られる安岡正篤(まさひろ)先生は、『悪に対応する道』について一文を残されています。その中で、第一に「弱肉強食の態度」をあげてあり、第二に「復讐的

態度」があると指摘されています。これは際限の無い修羅道であり、解決にはならないとされています。

その上で、「第三に、復讐的態度とは逆に、宗教的態度というものがある」と述べられています。そして、特にガンディーの非暴力主義を挙げ、「暴力によらぬ全身全霊をこめての宗教的信念・運動であって、単なる無抵抗主義ではない」と位置づけられています。この第三の道こそ、私たち信仰を持つ者が歩むべき方向であると信ずるのであります。

そして、安岡先生の示される「第三の道」を、現実世界で実現しようと努力されているのが、まさにエルワーズィ博士であり、「オックスフォード・リサーチ・グループ」の皆さまであります。イラク戦争という悲劇を経験した世界にとって、その役割は、ますます大きくなっていくに違いありません。

21世紀を迎えても、いまだ世界の軍事大国といわれる国々には、「人類の自爆兵器」とさえいえる核兵器が何千ともいわれる膨大な数、保有されています。万一、この兵器が使用されれば、人類のみならず、地球そのものが破壊されます。エルワーズィ博士は、そうした強い危機感から、核兵器の廃絶を目指して地道な活動を続けておられます。改めて敬意を表する次第であります。

核兵器の使用を抑止するためには、国家間、民族間の信頼を醸成していくほかにありません。本日の贈呈式を契機として、エルワーズィ博士を中心とする「オックスフォード・リサーチ・グループ」の皆さまが、人々の間に信頼の輪を広げられ、核兵器廃絶、武器輸出削減の歩みがさらに進展していくことを祈念し、あいさついたします。

皆さま、ありがとうございました。